

羽村市史編さんだより

令和4年1月

第28号

伸びゆくはむら



特集

天気のみかた

今号の内容

News

資料紹介

市史編さんの足あと

コラム「ちっとなべえ」

特集

天気のおよみかた



「今日はどんな天気だろう」「寒いかな」「午後から雨なら傘を持って行かなくちゃ」
天気は私たちの生活に密着しています。最近では、天候の変化が体調不良の原因となる気象病などが知られるようになってきました。また、天気予報や災害リスクはスマホのアプリでもすぐに確認ができます。いまや天気予報は、私たちにとって一番身近な情報と言っても過言ではないでしょう。
今回は、このように身近な天気の様々な“よみかた”をご紹介します。

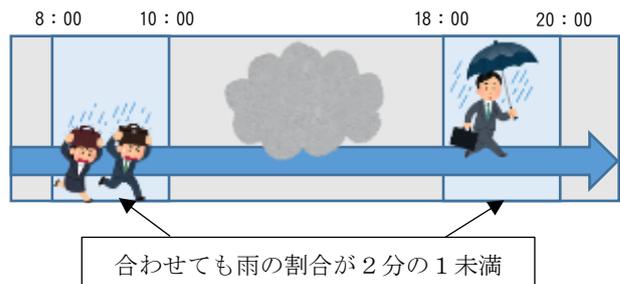
◆空模様をよむ◆

天気予報でよく耳にする「晴のち雨」や「曇り時々雨」は、どれも天気の変化があることを示します。「のち」は前と後で天気が異なる時に用いられます。晴れのあとに雨が降る「晴のち雨」、雨のあとに雪が降る「雨のち雪」というように、天気を「のち」でつなぎます。
「時々」は予報期間内の2分の1未満の時間、天気が異なる可能性が少しでもある場合に用いられます。半日以下の時間で雨の降る可能性がある場合は、「曇り時々雨」というように「時々」でつなぎます。

〈晴れのち雨〉



〈曇り時々雨〉



「雨または雪」と「雪または雨」は、前にくる天気がより可能性の高い予報です。雪の多い地域では、「雨または雪」の予報から水分を多く含んだ積雪となることが予想され、雪崩などのリスクに備えることができます。太平洋側の地域では、「雪または雨」の予報から降雪に伴う凍結や公共交通機関の乱れなどに備えることができます。

気象庁のホームページでは、天気予報で用いる予報用語^{※1}を調べることができます。気になる用語があれば調べてみるのも面白いです。

◆残された記録をよむ◆

市史編さんの調査では、過去の日誌や日報から当時の天気を調査しました。記録を比較すると、時代によって天気の表現に違いがあります。たとえば、

明治時代の日誌^{※2}では、

昭和50年代の日報^{※3}では、

「十二月三十日 土 ユキ午後晴」
「一月二六日 木 セイ午後七時ヨリユキ積凡一寸^{おおよそ}」
「二月二日 木 ドン午後七時ヨリユキ」

「12月11日 日 曇一時小雨のち晴」
「1月31日 火 曇^{のち}后雪」
「3月3日 土 晴^{のち}后曇夕刻小雨夜小雪」

明治時代の日誌では「午後七時ヨリ」と、具体的な時間とそれ以降の天気を記録しています。一方、昭和50年代の日報では「のち」「后^{のち}」を用いて天気の変化を記録していることが見てとれます。

◆身近な季節をよむ◆

春一番： 冬から春への移行期に初めて吹く、
暖かい南よりの強風

春一番の発表を耳にすると、春が近づいていることを感じます。

しかし、時に死者が出るほどの被害をもたらす強風でもあり、油断はできません。

ヤマセ： 初夏から秋にかけて吹く、
冷たい東よりの風

夏に北日本の太平洋側に吹く冷涼な北東風です。東北地方では、ヤマセが吹くと天気が崩れる、時化る、^{しげ}といい、冷害の原因となり、凶作をもたらす風といわれています。

木の芽時： 日平均気温が5℃以上になり、
木々が芽吹く3～5月頃

文字通り木々が芽吹く早春頃を指し、俳句にも使われる季語です。この時期は季節の変わり目でもあり、人の体調にも影響します。

また、気温が上がり暖かくなってくるため、雪崩が起きやすくなる時期でもあります。

木枯らし： 晩秋から初冬にかけて吹く、
北よりの強い風

ニュースなどで「木枯らし1号」の発表を耳にすると冬の到来を感じます。2021（令和3）年の東京地方では2年ぶりに木枯らし1号の発表がありませんでしたが、上空は徐々に冬型の気圧配置になっていきます。

からっ風： 冬に山を越えて吹いてくる、冷たく乾燥した北西よりの強風

冬の季節風で関東地方などでは「からっ風」とよびますが、局地的に吹く風には、その土地ならではの固有名詞がつけられます。たとえば関西では「六甲おろし」や「大山おろし」、関東では「赤城おろし」や「筑波おろし」などが有名です。

こういった冬の強風には、屋敷地の周囲に「カシグネ」を作り、対策を立てて生活してきました。カシグネとは、カシの枝を壁状に組んだ生垣です。羽村市域でもシラカシを用いたカシグネがみられます。防風のための生垣なので、カシグネの位置をみるとどちらの方角から風が吹き込んでくるのか知ることができます。

カシグネは、冬の強風を防ぐほか、防火や防犯の役割も果たしているといい、人々の生活の知恵として今も残されています。



▲市内のカシグネ

（『羽村市史 資料編 自然』p. 315 図 14-13-a より）

天気に関する知識や先人の知恵を知ると、ちょっとした災害リスクにも備えることができます。また、季節を身近に感じると気持ちにも余裕がもてます。

何かと時間に追われる毎日ですが、天気を“よんで”みるのもいかがでしょうか。

- ※1 気象庁ホームページ「気象庁が天気予報等で用いる予報用語」
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/yougo_hp/mokuji.html
- ※2 羽村取水堰にあった東京府土木課出張所の日誌「羽村日誌」
- ※3 羽村市水道事務所に保管されている日報



N e w s

第7回羽村市史関連講座を開催します！

『羽村市史 資料編 自然』から気候についてお届けします。
新型コロナウイルス感染症予防対策に注意を払いながら開催します。
皆さまのご参加をお待ちしております。

「羽村の気候－市内の気候の特徴と約100年前からの変化－」

- 日時** 令和4年2月19日(土) 午後2時～午後4時
- 会場** 羽村市生涯学習センターゆとろぎ2階 講座室1 (羽村市緑ヶ丘1-11-5)
- 講師** 赤坂 郁美氏
羽村市史編さん部会第4部会(自然担当)副部長 / 専修大学文学部教授
- 受講費** 無料
- 定員** 40人(先着順)
- 申込** 令和4年1月31日(月)～2月18日(金) (祝日を除く月～金曜日)
午前9時～午後5時
市史編さん室(電話 042-555-1111 内線365)へ電話でお申込みください。
※キャンセルされる場合は、市史編さん室までご連絡ください。
※新型コロナウイルス感染症の拡大状況により中止する場合があります。
- 問合せ** 羽村市企画総務部市史編さん室
☎042-555-1111 (内線365)



▲多摩川と積乱雲
(羽村市郷土博物館付近より撮影)

表紙の解説

福をよぶ神様

表紙の掛軸は、今号のコラム「ちっとんべえ」で紹介している、個人所蔵の史料群の中にあつたものです。三幅対^{さんぶくつ}といって、三枚一組で構成された掛軸には、七福神の絵図が描かれています。

富と幸福の象徴である七福神は、宝船に乗り、古くから信仰されている縁起のよい神様です。掛軸なのでおそらく床の間に飾られていたのでしょう。

正月などの祝い事の時に飾ると、さらに福を呼びそうな縁起のよい史料です。

- (左) 福祿寿・寿老人・布袋
- (中央) 恵比寿・大黒天
- (右) 毘沙門天・弁財天



資料紹介

今回は『羽村市史 資料編 民俗』から取りあげました。

「天気予報の知恵」 (資料編 189 ページから第1部第8章「口承文芸」)

文字ではなく、口から耳へと伝えられてきた民俗を、口承文芸といいます。次の三つの吹き出しは、羽村市域に伝わる天気に関する知恵の伝承です。そこには、空の様子や生物の行動から天気の変化を予想する、観天望気の知恵が詰まっています。

大岳山の黒雲が
ホーイホーイ
あの雲がかかれば雨か嵐か
ホーイホーイ

「棒打ち歌」^{※1}の一節です。大岳山は羽村市の西に位置する山で、市域からよく見えます。他にも「大岳山が霧まきになっていると(もやがかかっていると)、その日は天気が崩れる」という伝承や、「…昨日、原へ行くと、大岳山に黒い雲がやってきて雷が鳴り、大粒の雨が降りました…」^{※2}という昔話も残されています。

反対に、「秩父のから鳴り 音ばかり」というものもありますが、秩父で鳴る雷の音はよく聞こえても、その雲は市域にはやってこないのだそうです。

青梅線の汽笛が
良く聞こえると
雨が降る

生活の身近にあった「青梅線の汽笛」と天気の変化を結びつけた、地域ならではのものです。

湿度が高くなると、空気中の水分量が多くなるため音が伝わりやすくなります。よく知られている「ネコが顔を洗うと雨が降る」も湿度の変化によるもので、湿気で重くなったひげや毛を手入れする様子を天気の崩れと結びつけたものです。

五月から六月にイカルが
「ミノカサホシイ」
と鳴くと雨が降る

鳥の鳴き声を人間の言葉になぞらえていうことを「聞きなし」といいます。イカルは、春から夏の繁殖期にかけて「ミノカサホシイ」とさえずります。ちょうど梅雨の時期にあたる頃、まるで「蓑笠ほしい」と雨具を欲しがっているように聞こえます。

また、「ゴイサギが北に向かって鳴くと晴れる、南に向かって鳴くと天気が崩れる」という伝承もあります。夜行性のゴイサギは夕方から活発に活動を始め、「グワァー」と大きな声で鳴きながら飛んでいきます。飛んでいく方向で、翌日の天気を予測したのでしょうか。



▲イカル^{※3}



▲ゴイサギ^{※3}

『羽村市史 資料編 民俗』では、天気に関する知恵が詰まった伝承以外にも、市域に伝わる世間話や伝説なども紹介しています。

※1 麦の脱穀作業など共同で作業するときに歌い、全体のテンポを合わせた。

※2 「よこっちまの九兵衛さん」(『続はむらむかし』より)

※3 羽村市教育委員会『新版はむらの野鳥ガイド』より



市史編さんの足あと

※①～⑤は部会の数字です。(例) ① ⇒ 第1部会

月	日	できごと
10月	4日(月)	③近現代部会会議
	18日(月)	①遺跡現場見学 (以降、定期的に作業進捗の確認)
	19日(火)	③近現代部会打合せ(オンライン)
	21日(木)	市制施行30周年記念誌納品 ③資料調査
	25日(月)	④市内植生調査
	26日(火)	③⑤資料調査(市内個人宅)
	27日(水)	第19回羽村市史編さん本部会議
	11月	1日(月)
8日(月)		②近世部会打合せ

月	日	できごと
11月	15日(月)	③近現代部会打合せ
	22日(月)	⑤民俗部会会議(オンライン)
	25日(木)	④市史関連講座打合せ ③資料調査(農業委員会)
	30日(火)	③近現代部会打合せ
	12月	1日(水)
2日(木)		③資料調査(農業委員会)
22日(水)		⑤民俗部会会議(オンライン)
23日(木)		③近現代部会会議
27日(月)		②近世部会会議

「伸びゆくはむら」バックナンバーは以下の場所でご覧いただけます。

- 市史編さん室(市役所西庁舎3階)
- 羽村市図書館(3階地域資料コーナー)

このほか、羽村市公式サイトでもご覧いただけます。

▼公式サイトは
コチラから



コラム

ちっとなんべえ

第28回「資料整理の楽しみ」

個人宅に眠っている古文書や写真は、地域の歴史を伝えてくれる貴重な記録です。市史編さん室では、市民の方々のご協力のもと、これら歴史資料の調査を継続して行っています。

お預かりした資料は、1点ずつハケや布でクリーニングし、大きさや内容を記録した後、封筒に入れて整理していきます。封筒に入れることで、資料が害虫や湿気、摩擦などから守られ、管理もしやすくなります。時間と労力がかかりますが、資料を後世に遺していくためには欠かすことのできない作業です。

右の写真の郵便はがきは、資料整理中に見つけたもので、いずれも昭和25年の年末から翌年に

かけて差し出されたものです。消印には、「年の瀬の迫らぬうちに年賀状」「あて名は正確・明瞭に」といった郵便局の標語や、「森永ミルクキャラメル」の企業広告が入っています。

地道な作業の合間のこうした発見も、資料整理中のささやかな楽しみのひとつです。



※「ちっとなんべえ」とは、羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味です。